

【「北水S51卒+α 33年振りに函館でのむかい？」を開催】

松本 邦彦 (51食)

昭和51年は第二次オイルショックと200カイリ問題のWショックで、過去にない就職氷河期でした。翌年に卒業を繰り延べる同窓も多く、また出るときは同じでも早くから居た方（出るのも遅い方もいらっしゃいます）、最後まで出れなかつた方など3~4歳違いは当たり前の時代でした。そんなこんなで、「+α」が付いております。

この様な会も既に札幌で5年前から、東京では昨年から行っている会で、昨年の東京で「来年は函館で！」との声が出て（酔った勢い・・・）、その場で約束をしてしまい、今年に入り若干の後悔の念を持ちつつも、「たとえ5人でも実施します。」と案内状を70名程に出したところ、25名の出席。遠くは石垣島や広島と全国各地から馳せ参じて戴き、幹事として日々感謝の一言でした。

6月6日18:30決戦の時、一人の遅れも無く開会、初めはお互い戸惑いの表情もありましたが、ネームレートと顔を見つめ合い、いきなりタイムスリップの光景が会場のあちらこちらで・・・。

途中、ひとりづつ近況報告を演台で始めましたが、何を思ったかいきなり6人の同窓が壇上に上がり各自の禿げ（ほとんど無い状態）比べ、会場大いに盛り上りました。

役職も地位も収入も今置かれている環境も全てを忘れ、33年前の青春に戻り、話をしながら記憶が戻る。ただ「食べる事」に執着していた我々の世代は、その事が幸いにも価値観が最も共有でき、昔話も一番多く出ていました。  
(33年振りに懺悔の方もちらほらと)

最後に、「水産放浪歌」「校歌」「都ぞ弥生」と前口上付の3連発。どの顔も60前のおっさんがこめかみの血管を浮き出して、会社や家庭では絶対に見せない自分を曝け出しました。

二次会は二手に分かれて万代町「野武士」と深堀町「たにし」(以前の「ごん平」娘が継いでいる)。「野武士」組は、店の戸を開け、かあさんの顔を見た瞬間、数名の者が「まだ、生きてる！」(香典を出す気もないくせに勝手に殺すな！)。33年前と同じ「樽酒」を飲み、干物を焼いてもらい甘えてきました。

翌日はバスを貸切、荒井君(教授)の案内で母校を視察し、全ての講座に旧講座名が書いてあり感激。その足で、北晨寮を拝見。年内に改築されると聞き、たまたま絶妙のタイミングで我が青春の住まいを見ることができました。

言葉の言い回し、ちょっとした癖、対話する時の表情と殆ど33年前と変わってない印象でしたが、唯一違う事。宴



会の開始、バスの集合時間にひとりも遅れずに団体行動が取れるようになった事です。皆さん、真っ当な大人になりました。

参加者：荒井克俊、飯田浩二、飯田（高杉）真希恵、五十嵐恵一郎、今井俊治、片岡辰三、糸井秀之、末岡順、中尾博巳、日田栄一、松本邦彦、宮下晃一、木村講次、北出弘、田中章夫、田中夫人、梅澤道彦、原田晃、渡辺好一、矢部衛、渡辺利明、吉田和彦、島内茂、斎藤昌宏、藤島浩晃

※本記事は前号（第293号）用に投稿していただいたものですが、編集部のミスで掲載が遅れてしまいました。深くお詫び申し上げます。

## 【卒業60周年記念 第17回臥牛会北湯沢大会】

昭和24年（製）志田 恵穂

昭和24年（1949年）製造科卒業の同期会である”臥牛会”の17回目の大会が10月13・14日の両日、抜けるような秋空の下、見事に色づいた紅葉に囲まれた北海道有珠郡大滝村北湯沢温泉旅館第二名水亭に於いて開催されました。

参加者は会員14名、夫人5名併せて19名と過去の最低記録となりましたが、これも年齢的に皆後期高齢者、加えて新型インフルエンザの流行が重なっては体調不良の報が多く寄せられるのも致しかたないことと存じます。特に会長の宮崎一郎君未だ病状回復せず入院治療中、また地元幹事として春から先頭になって交渉役を引受けてくれた北林・井原両幹事が風邪でダウン欠席となるアクシデントもあり、いつもの顔が見えない寂しさを感じたのは私だけではないと思います。

会の開催はほぼ一年置きに開催し、函館を軸として金澤・東京・横浜・仙台・盛岡と開催年毎に場所を選定し、平成9年仙台では会員35名、夫人14名の総員49名の最高参加者を記録し、まさに本日とは隔世の感がいたします。

本年卒業60周年を迎えたということは、会員の年齢が80歳を超えたことを意味し、不参加のメンバーからの連絡を見ても健康に関する内容の多いのが現実で、総会の席上でも今後の臥牛会について議論続出、明年10月函館開催で結論を出すことと致しました。

翌日は大滝村のキノコの里王国で買物を楽しみ予定とうり正午札幌駅北口到着、明年函館再会を約して散会となつた。

また札幌の幹事皆様のご苦労に心から厚くお礼を申しあげます。

出席皆様のご健康を祈念申しあげ北湯沢大会の報告といたします。



卒業60周年記念北大水産学部臥牛会総会 於北湯沢第二名水亭 平成21年10月13日

（後列左より）瀬川二夫、市川勲、日野照夫、藤本俊彦、高橋 大、中村 仁、荒木道雄、真壁賢治、大滝豊太郎、直江光昭、野畠順二

（前列左より）長沢正徳、高橋夫人、志田夫人、荒木夫人、日野夫人、田畠夫人、志田恵穂、田畠 収

## 【北水 S25 製造クラス会報告】

佐々木一弘 (S25 セ)

昭和 25 年（1950 年）に卒業した我々は、2010 年 3 月で卒後 60 年となる。当時は、陸士、海兵をはじめ軍隊からの復員、復学者が多く年齢も様々で、最高は 10 才を越える年齢差があった。卒業者は、一類・二類合わせて 89 名である。

全体的なクラス会は、昭和 50 年頃以降、数年置きに函館、青森、仙台、宇都宮、横浜と全国各地で引き継ぎながら開催してきたが、平成 12 年（2000 年）の横浜を最後に、次回開催予定地であった大阪の平瀬正二君の急逝によって頓挫したままとなっていた。

60 年を機に再びクラス会をとの声が上がり、今秋（2009 年）、9 年ぶりに懐かしの函館で開催することとなった。89 名中、物故者が 32 名と消息不明の 13 名を除く 44 名に呼びかけて、最終的に本人 13 名、夫人 5 名の 18 名が 10 月 28 日（水）、湯の川の平成館海羊亭に集合した。メンバーは、釧路から杉山繁、帯広から斎藤誠一（夫妻）、札幌から納谷昭虎・松川光美・木太英男、函館から加藤隆康、青森から鈴木慶照、仙台から佐々木一弘（〃）、群馬館林から下河原修、東京から岡村定典、真田幸雄（〃）、佐藤敏郎（〃）、横浜から福田正彦（〃）。

久方ぶりの再会で、なかには卒業以来の顔合わせもあり受付で戸惑う場面もあったが、声を交わせば忽ち往年の学生時代にフラッシュバック・・・久闊の交換となった。懇親会では、各人からの卒業後の足取りから近況報告などのスピーチに、笑いやら頷きやら質問などが飛び交い和やかに旧交が暖められ、最後は北晨寮逍遙歌を高歌して締めくくられた。席を替えての二次会では、参加できなかったクラスメートの消息や尽きない学生時代の思いで話などに湧き、大いに盛り上がった。

翌 29 日（木）は、ジャンボタクシー 2 台に分乗して函館市内の観光スポットである立待岬—函館山—カトリック元町教会—金森赤レンガ倉庫などを巡った後、母校北大水産学部を訪問した。井尻成保准教授（増殖生物学；平成 4 ゾ）の出迎えをうけて、学校の現況説明と施設の案内を頂いた。マリンフロンティア研究棟・マリンサイエンス創成研究棟・・・すっかり様変わりした母校に今浦島の感を抱きつつ回ったが、水産科学館でかつての正面玄関にあった剥製の大トドに対面し、さらに今も昔のままの講堂（フローリング等改修されてまだ現役のこと）では卒業式のときの実感が甦り、感無量なるものがあった。ついでながら、寮生がお世話になった学校隣地の南瓜畑は全く住宅街に変貌していた。

母校を辞してから、五稜郭で高さ 100 m の五稜郭タワーから函館市内を見渡しながら、五稜郭公園内の全校運動会の思い出などを語り合った。

市内観光を終って函館駅前のロワジー ホテルで昼食をとり、予定の午後 2 時、互いの健勝を念じつつ名残を惜しみながら解散した。

今回参加した中で、加藤、真田、松川の 3 君は年長であると分かっていたが、あらためて 3 人とも大正 14 年（1925 年）生まれであると聞いて驚いた。我々は昭和 4 年、5 年（1929, 30 年）が主体であるが、昭和組より大正組が皆背筋も腰もピシンとしており、大正からの「元気でまた会おう」の声に励まされる思いであった。

次回のことは具体的に決まらずじまい



（写真後列左より）真田夫人、真田、納谷、福田、佐々木、鈴木、佐藤

加藤、松川、杉山、斎藤

（前列左より）下河原、木太、岡村、福田夫人、佐々木〃、佐藤〃、斎藤〃

に了わったが、少なくとも 3 君の今の年令位までは頑張らなくてはと感じた次第である。

なお、此の度のクラス会開催に当たってホテルの手配など種々お世話いただいた在函の松谷勇氏（下河原等函館中学同級生）に、この稿を藉りて感謝申し上げる。（佐々木一弘記）

## 【卒業 50 年記念同期会】

昭和 34 年卒米田義昭

秋たけなわの平成 21 年 10 月 2 日に昭和 34 年卒業生の同期会が鹿部ロイヤルホテルで行われた。卒業 50 年の節目となる記念すべき同期会には全国各地より 22 名の同期生が参加した。前泊者 13 名はゴルフや八雲に遠出してのパークゴルフと 2 班に分かれて日頃の技を競った。夕刻ホテルに戻り、一風呂浴びた後、懇親会と若干ハードスケジュールであった。

会宴に先立ち、今年 6 月に入ってから急逝した目黒鉄雄（増殖）、谷崎至（増殖）、荒川康雄（遠漁）の 3 君に対しお悔やみの黙祷を奉げた。

地元の菊地英樹君より歓迎の挨拶の後、遠路大阪から駆けつけた川岸正治郎君によるスピーチと乾杯の音頭で宴に入った。宴もたけなわとなった頃、参加者より近況報告があった。「年々歳々花相似たり、歳々年々同じからず」という言葉通り、卒業後の半世紀に亘る風雪に耐えた同期生一人一人の人生観が短い言葉の中に凝縮しているように感じられた。しかし、飲むほどに酔うほどに、話題は学生時代に戻り、夜の耽るのも忘れ、思い出話に花が咲いた。佳境に入り同期会の今後についての議論になったが、今後も毎年継続ということで衆議一決、次は札幌と声がかかり、当地に佐藤慎一郎より「よし引き受けた」という一声で札幌開催が決まった。締めは、元青函連絡船船長の北山榮雄君の口上で「都ぞ弥生」と「北晨寮逍遙歌」を齊唱、次回世話役の佐藤君より「来年札幌で会おう」の声で乾杯しお開きとなった。

写真は前根室市長の藤原弘君が同期会のために寄贈した横断幕を背にした参加者全員による卒業半世紀を経た勇姿である。



## 【北水同窓会京滋支部総会の報告】

2009.11.29 (支部長小林正昌 (39 ゾ))

去る、11月7日（土）京阪ホテル内レストラン「オーク」にて北水同窓会京滋支部会を開催しました。支部会員の出席は10名とやや寂しい会合となりました。関西での新型インフルエンザ大流行中のさなかで何人かの会員から注意をしたいとの欠席連絡があり、出席者への影響もあったようでした。

記

日時、場所：21年11月7日（土）17時30分より、レストラン「オーク」にて  
出席者：10名

- (I) 総会議事
- ・20年度一般経過報告
  - ・決算報告に続き、高木監査役(61歳)より監査報告があり承認されました。
  - ・21年度事業計画(案)、予算(案)、共に承認されました。
  - ・21年度北水同窓会本部会が札幌にて5月23日（土）開催があり出席して来ました。（小林）
  - ・22年役員改選について
- 全員留任と決定されました。

支部長 小林正昌 (39 ゾ)

幹事（滋賀担当）澤田宣雄 (60院)

〃（宮津担当）高木正夫 (62歳)

- ・水産学部のフラッグ・シップ「おしょろ丸」就航100周年記念行事の説明。

(II) 懇親会

目片先輩(33ゾ)の乾杯の音頭に始まり、暫しの歓談、「都ぞ弥生」「逍遙歌」「放浪歌」を大合唱し、来年の再会を誓い散会しました。

(III) その他

目黒鉄雄先輩(34歳)が21年6月6日逝去されたとの悲報をご夫人より連絡があり、出席者全員にて喪心よりご冥福をお祈りしました。

以上



北水同窓会京滋支部会 2009.11.7. オークにて

参加者（敬称略）（向かって右より）

1列目 目片 (33ゾ)、山田 (36エ)、今野 (39ゾ)、小林 (39ゾ)

2列目 高木 (62ゾ)、澤田 (60院)、近藤 (54化)、中山 (40ギ)、若林 (53ゾ)、大寄 (H元食)

## 【北水同窓会函館支部（秋の同窓会）報告】

宮崎永司（平1ギ）

平成21年11月26日（木）、18：30から、ホテル函館ロイヤルにおいて、標記の会を開催しました。年末を控え、皆様お忙しいにもかかわらず、40名もの参加をいただきました。

宴は、北大水産学部交響楽団員有志4名が奏でる弦楽4重奏、モーツアルト作曲「アイネ クライネ ナハトムジーク」の演奏で開宴しました。続いて本部同窓会幹事長である飯田浩二(S51ギ)教授による乾杯があり、しばしの歓談の後、学部・学生・卒業生の活動紹介の時間を設け、「北水応援団」、「in the Loop 函館」、「学部の新施設」の紹介をしていただきました。

「応援団」は新団長の襲名披露に続き、パワーポイントによる活動の様子を映像で紹介してもらいました。大先輩から「演舞はどうした?」「援団がパワーポイントかい!」など相の手が入りましたが、おしゃろ丸出港式の映像を見て、大先輩達も一気に学生時代を思い出したようです。

「in the Loop 函館」は、現役学生の社会参加をサポートする学生団体で、こちらも映像を流して活動の模様を紹介してくださいました。

「学部の新施設」の紹介は、井尻成保北水准教授（H4ゾ）から、学部敷地に建っている「マリンフロンティア棟」「マリンサイエンス創成研究棟」について映像を交え紹介していただきました。

参加者には、学部事務室からいただいた「水産学部マップ」が配られ、「おしゃろ丸就航100周年記念式典」の様子も含め、参加者に母校の現況を知っていただきました。

〆の乾杯は、来年度から函館支部事務局を担当する函館水産試験場を代表して渡辺安廣氏(S49ギ)のご発声で行われ、「さらに充実した同窓会にするぞッ」という力強い言葉を頂戴し、万雷の拍手が起きました。

最後は、応援団のリードで、「水産放浪歌」を参加者全員、現役学生から大先輩まで、みんなで肩を組んで大合唱しました。そのまま恒例の記念写真撮影を行い、今年度最後の宴は、お開きとなりました。



北水同窓会 函館支部 秋の同窓会 2009.11.26 於：ホテル函館ロイヤル

参加者は次のとおりです。

寺 地 潔 (S28ゾ)、羽田野 六 男 (S31セ)、高 野 和 則 (S32ゾ)、島 崎 健 二 (S33エ)、  
泉 滋 (S37エ)、絵 面 良 男 (S37セ)、澤 崎 達 孝 (S37ゾ)、安 間 元 (S38エ)、  
大久保 征 二 (S39セ)、早瀬 孝 重 (S39エ)、奥 野 信 博 (S40エ)、米 田 国三郎 (S40エ)、  
大 野 元 經 (S40セ)、工 藤 昭 彦 (S44ゾ)、志 賀 直 信 (S44ゾ)、石 尾 敏 文 (S47ゾ)、  
渡 辺 安 廣 (S49ギ)、飯 田 浩 二 (S51ギ)、我 妻 雅 夫 (S52ゾ)、尾 島 孝 男 (S54化)、  
西 川 正 一 (S56ギ)、種 田 貴 司 (S56食)、小 笠 原 昇 市 (S59ゾ)、山 本 和 人 (S59ゾ)、  
山 口 重 幸 (S62ギ)、大 西 広 二 (H1ギ)、宮 崎 永 司 (H1ギ)、清 水 宗 敬 (H3ギ)、  
工 藤 秀 明 (H3ゾ)、井 尻 成 保 (H4ゾ)、笠 井 久 会 (H12資)、澤 村 正 幸 (H5ギ)、  
兵 庫 隆 俊 (H5ギ)、阿 部 慶 太 (H5化)、小 園 敏 弘 (H9ギ)、中 野 紀 彦 (H10ギ)、  
宮 崎 和 貴 (H10ゾ)、鶴 岡 理 (H15生)、岸 本 祐 二 (H15海)、鋪 明 子 (H19資)

## 【命を見つめて 50 年】

S 37 ゾ 小野里坦

高校時代、感銘を受けた授業がいくつかあった。その最たるものは化学の分子の授業だった。地球上の全ての物質がわずか 100 余りの元素から成り立ち、これらの元素もたった 3 つの要素、陽子と電子と中性子からなる。元素の違いは単にこれらの数の違いであることを知った時、身震いするほどの興奮を覚えた。もう一つは物理学である。身の回りに見られる物理現象のほとんどが、限られたニュートンの法則によって説明されてしまう点であった。その時感じたことは森羅万象、いかにも複雑で解き明かすことができないようなものも、実は極めて単純な法則から成り立っているということである。それに引き換え、生物学はなんと雑然とした学問か。生理学、生態学、発生学…いずれも独立独歩でお互いの関連性は実に希薄であった。生物に対する興味が強かつただけに、私は生物学に対し大いなる不満を持っていました。この不満を解消してくれたのが DNA の構造解明である。生命現象のほとんどがたった 4 つの塩基の並びで説明できる。そして、生物学のあらゆる分野が DNA を仲立ちとして一つの学問となった。これこそまさに原子の発見、ニュートンの法則にも匹敵しよう。

高校の生物で感銘を受けた授業が無かったというわけではない。中学の頃から進化について自分なりに考えていた。神を信じない私は自然界の意図的力を否定し続けていた。それにも関わらず、なぜ、合目的進化が起こるのか。なんとしても説明がつかずにいた。そんなときダーウィンの進化論（（突然）変異と自然選択）を学んだ。まさに目から鱗が取れる思いであった。それ以来、私はダーウィンの考えに惚れ込んでしまった。中立変異と遺伝的浮動による進化が、あたかもダーウィンの進化論と対峙するように、あるいはそれを否定するかのように語られた。しかし、適者生存は裏を返せば不適者淘汰である。中立変異は当然自然選択の対象から除外される。そこには遺伝的浮動の概念も自ずとして入って来よう。結局はダーウィンの説に包含されてしまう。

分子生物学的立場から進化なり系統の研究に入った若い人たちの中には、生物そのものを見ずに、分子だけから進化を論議しようとする人たちも少なくない。その場合、機能的遺伝子よりむしろ機能を持たない DNA 配列に目が向いてしまう。彼らには遺伝的浮動による生物進化説がごく当然のように受け入れられてしまう。しかし、われわれが生物を見てそれなりを認識するのは、外に現れている形態、行動、生理などである。機能を持つ遺伝子の表れのみが認識の対象となる。これらの形質はいずれも驚くほど精巧で機能的、合目的に成り立っている。それは、高等生物から単細胞生物に至るまで、そして器官から細胞の中の微細構造に至るまで然りである。この精巧なメカニズムを確立するのに单なる遺伝的浮動でどうして説明できようか。

ここで私は分子生物学の進化論に果たした役割を否定しているのでは決してない。進化がたどって来た道筋、すなわち系統関係を解明する上で、また分子時計を使った分岐年代の推定にどれだけ貢献しているか論を待たない。これまで断片的証拠でしかない化石以外に解析手段を持たなかつた研究者にとって、分子生物学はこの上ない贈り物であった。

ダーウィンの進化論を学んだときに、私にはどうしても解せない課題があった。ダーウィンの説では、数々の変異の中で、よりその環境に適した変異を持つ個体が選択されその形質が次世代に伝えられるというものである。社会性をもつ昆虫にはそれぞれ持ち場に応じて形態そのものを変化させているものもある。たとえば兵隊アリは並みいる敵を倒すため強力な顎を発達させている。顎が発達すればするほど自分の生き残るチャンスが増えるかもしれない。しかし、働きアリは生殖能力を持たないのである。それにも関わらずなぜこのような進化が起りえたのか。この問題は私にとって大きな命題で大学院を終える頃まで考え続けた。ひとつのことを考え出すと何年も考え続けてしまうのが私の常である。あるとき自分の体に置き換えてみた。発生の過程で体細胞に起こった変異は如何にその変異が生存に適していてもその形質を子孫に伝えることができない。あくまでも生殖細胞に変異が起り、それが次世代で発現したときに自然選択の対象になることに気づいた。これをアリに当てはめると女王アリが生殖細胞に相当し、働きアリは体細胞に相当する。ここで、アリの社会集団自体がひとつの個体に相当するという概念が自分に芽生えた。これが私の命に対する考え方の基本になっている生命の階層性にもつながった。超個体という便利な用語に出会ったのはそれから何年もしてからのことであった。

利己的遺伝子を著したドーキンスの説がもてはやされている。この本を読んでいると実に論理的で異論を挟み込

む余地がない。しかし、生命現象には利他的なものも存在し共存を想定している私には全てを利己で説明しようとするこの考えに違和感を覚える。何かが違うと思いながらも彼の説を打破できず、読んでいるうちにいらいらしたものであった。しかし、遂に次のような考えに至り、これに対しドーキンスはどのように反論するのか、楽しみである。遺伝子とて、配偶子形成の際の減数分裂時に対立遺伝子と部分的に交換し得る。さてどこまでが己か。進化はあくまでも選択の結果であって、主観的思考の導入自体に無理があるのかも知れない。

子供の頃はヒトという生物が他の生物からえらくかけ離れて見え、他の生物と同列に考えることは思いもよらないことであった。しかし、生物学を学ぶにつれヒトも生物の一員であることが受け入れられるようになった。さらにそれが昂じて今ではヒトを他の生物から区別する何があるのかと考えるに及んでいる。結論としてはネコをイヌから区別するのと同レベルではヒトをサルから区別し得ても、ヒトとヒト以外の生物の区別はナンセンスと思っている。最近では人工と自然の区別にも疑問を持っている。アリが巣穴を掘ったり、木の葉を巣に持ち込んでキノコを育てるのを蟻工と呼ぶなら、それと同格で人工もありうる。しかし、蟻工が自然であって人工が自然から区別されるはずはない。私は函館時代に南北海道自然保護協会の会員として活動していた。自然保護という言葉にも引っかかっていた。自然の一員である筈のヒトが自然保護とは、ヒトを特別視した思い上がりではないかと。ヒトという生物の営みによる環境変化は余りに急激で、多くの生物がそれに対応できず絶滅に追い込まれ、生物の多様性を著しく低下させている。この環境変化が最終的にはヒトの生存をも脅かすであろうとの考え方の下に活動に望んでいた。

今、化石燃料由来の炭酸ガスによる地球の温室効果が騒がれている。しかし、元々この炭酸ガスは大気中に存在しており酸素は存在していなかった。この時代には嫌気的生物がこの地球を謳歌していた。ところが、炭酸ガスを利用して光エネルギーを化学エネルギーに変える生物が現れてきた。当時の地球は生命に有害な酸素濃度が高まることで、多くの嫌気的生物が絶滅し、代わって酸素を利用する好気的生物が勢力を伸ばしてきた。現在では嫌気的生物は限られた環境の下で細々と生き残っているに過ぎない。嫌気的生物にとってはひどい公害であったろう。当時の光エネルギーを固定した生物の遺骸が化石燃料である。ヒトの営みによる炭酸ガスの放出は彼らが一旦化学エネルギーとして蓄えたものを再び大気に戻しているに過ぎない。これも地球生物の営みの長い歴史の中の一コマに過ぎないであろう。

ヒトの営みによる環境変化が大きな話題を呼んでいるが、それ以上の環境変化を地球は何度も経験している。その一例が恐竜を滅ぼしたとされる大隕石の地球への衝突である。そのときの粉塵が天空を覆い光不足で多くの植物が枯れ、それを餌とする動物も滅んだ。しかし、生命とはそのくらいのことで滅びるほどのよわではない。わずかに生き残った生物から今日見られるような多様な生態系が回復したのである。今ヒトが環境破壊を続ければ早晚ヒトは絶滅の道を歩むであろう。しかし、その後に生き残った生物が必ずや豊かな生態系が回復させるであろう。ヒトが再び現れない限り、今より平和な生態系が維持されるかもしれない。

私が水産学部の助手をしていた頃、当時大学院生だった後藤晃君、宇藤均君、川真田憲治君、石野健吾らと夜遅くまで進化について喧々諤々論争したことを懐かしく思い出す。このエッセイもそのころの議論が基礎となっている。あのころを思い出して学生さんに議論を持ちかけるのだが、最近の学生さんは論議することをあまり好まないように見える。しかし自分の考え方を形作るうえで議論は大変有効である。学生時代に大いに議論しあうことを勧める。

退職時にこれを書いたので、今では「命を見つめて55年」になっている。

## 【おしょろ丸】

増田紀義（25エ）

### おしょろ丸三世の終焉とおしょろ丸四世の誕生

おしょろ丸三世の老朽化により昭和57年、昭和58年の2カ年計画で代船建造費が認められた。学部では代船建造委員会を組織し、水産庁、漁船協会などの支援を得て入札の結果三井造船株式会社が落札した。

新造船は3月9日同社玉野事業所で起工式が行われ、引き続き8月19日進水式に本学有江幹男学長の「おしょろ丸」命名に伝統ある「おしょろ丸」（四世）が誕生した。予算の関係上とロール・ワインチは三世より移設になっていて、最後の航海を終えた三世が9月9日工事のため玉野に来港し、ワインチを取り外して函館に帰った。そして、11月16日再度玉野に来港した。若干の道具類の移動と整理・整頓、乗り組み各自の四世での機器の習熟のためである。

おしょろ丸三世は船舶としての活用は断念され、解体に決定した。そこで、記念品として予備大錨を函館に持ち帰られるようにお願いして許された。（「親潮」第375号参照）。

舾装を終え幾度か試運転もし写真の撮影もすませた。工事は完了した。

12月19日。造船所の皆さんに見送られ、ドックのスタッフの運航で函館に向かった。少し離れた岸壁に三世が眺められた。22年間多くの学生に夢を与え、その調査、研究に携わって来た今、華やかな引退式も無く四世の乗組員だけに見送られた静かな引退だった。

12月23日。無事函館に着岸。おしょろ丸四世のサロンにおいて引き渡し式が挙行された。東京本社より来函の三井造船の代表者より、辻野学部長に「引き渡し証」と共にマスター・キーが手渡された瞬間、合図と共にメイン・マストに掲揚されていた三井造船の社旗が降ろされ、代わりに真新しい水産旗が掲揚された。水産学部附属練習船おしょろ丸の誕生です。出迎えの職員、学生、その他の皆さんに万歳三唱して祝福してくれました。

### 処女航海

昭和59年1月21日。特専8名が乗船し処女航海として函館を出港した。

最新鋭の機器類を装備した漁撈機械類は騒音対策として油圧駆動を図った。陸上では試運転を重ねたが、荷重を加えた運転は不可能だったので、許可を得て十分な水深において試験を実施した。新装備の機器の試運転のため、三井造船より担当者、C.T.D.の技術者も乗船しそれぞれに作業を隸め、乗り組みはそれらの機器の習熟に励んだ。実習生にはそれらの概況を説明し、カリキュラムの変更を承知させた。

新おしょろ丸の竣工に当たり各地の関係者、同窓から多大の激励、支援を得てきたので、そのお礼方々披露に寄港した。東京、清水、鹿児島、長崎、下関、玉野、神戸。

船内の見学に当たり、皆様には機器類の完備、居住設備の快適さに感心されていた。沢山の祝詞を戴き、歓迎を受け満足して3月9日無事帰港した。

### 第2次航海

昭和59年4月。カリキュラムに従って漁業科3年目学生39名乗船。東シナ海でトロール実習を行った。指導教官、研究者も参加した。帰路、舞鶴に寄港して新船建造にたいする同窓の皆さんのご支援に謝意を述べ、おしょろ丸を改めて披露した後函館に帰港した。

### 第3次航海

昭和59年6月5日。特専12名、研究者6名を乗船、北洋航海に出港の予定であったが、藤井船長が突然発病して入院された。医師によると「軽度の脳梗塞で航海は無理」と診断された。そこで、見送りに來ていた練習船運営委員会のメンバーがサロンで臨時の委員会を開催して、「増田主席1帆士を船長事務代理として明日出港させる」と決議した。そのことを藤井船長に報告に行きました、「気をつけて、何時ものとうりやって来い」の一言でした。翌日6日北洋に向けて出港した。水産庁と協議した「北洋調査実施要綱」に則って操業、調査、観測を完全に

実施して来ることを心に決めた。

定点の180°経度線調査、ベーリング海調査に加えて、本学とアメリカとの共同調査としてアラスカ湾調査、55°N線調査、155°W線調査が加わり、北大太平洋における浮魚類の分布と餌生物環境および海洋環境との関係。北太平洋亜寒帯海洋全線付近の海洋構造と生物群集の生態学的研究などの研究課題がまとめられ、セワード、ジュノーからアラスカ大学、ワシントン大学、オークベイ水産研究所より研究者30名が交代で乗船し、ハワイで下船の研究者も沢山いました。

おしょろ丸での調査結果は貴重な資料として北星丸の資料と共に北海道大学水産学部の海洋調査漁業試験要報に掲載して公表して來た。

寄港地セワード、ジュノーでは地元の皆さんから大歓迎を受け、祝福されました。藤井船長の発病に皆さん驚くと共に、一日も早い快復を願っておりました。8月22日無事帰港した。

帰港数日後藤井船長は病気が快復、おしょろ丸船長に併任され、増田はおしょろ丸事務代理を免じられ、首一航士に併任された。

#### 第4次航海

昭和59年9月1日。増殖学科3年目学生40名。教官と研究者20名は海洋実習として、底棲生物の分布調査のためトロール、海洋環境はC.T.D.による海洋観測、プランクトン・ネットでの採集を行った後、釧路に入港して新造船おしょろ丸を披露した。同窓と関係者の皆さんから祝福され、函館に帰港した。1週間の実習だった。

#### 第5次航海

昭和59年10月11日。食品学科2年目学生47名と教官5名。水産化学科2年目学生48名と教官6名は交互に函館青森間の片道航海です。

1年半札幌で教養課程を終了後、函館移行時実施された。

#### 第6次航海

昭和59年10月15日。藤井船長は「練習船おしょろ丸船長の併任を解除する」。同日増田主席1航士は「練習船おしょろ丸船長に併任する」の辞令を受けた。職務の交替である。

同年10月19日。特専7名、漁業学科14名、教官・研究者7名を乗船させ、最初の寄港地東京に向けて出港した。

東京では24日。赤坂プリンスホテルでおしょろ丸四世の歓迎懇談会が開催された。学生21名、藤井前船長、増田新船長をはじめ士官・大学関係者が招待され、同窓会側からは、宮原全漁連会長、遠藤全底連会長（北水会東京

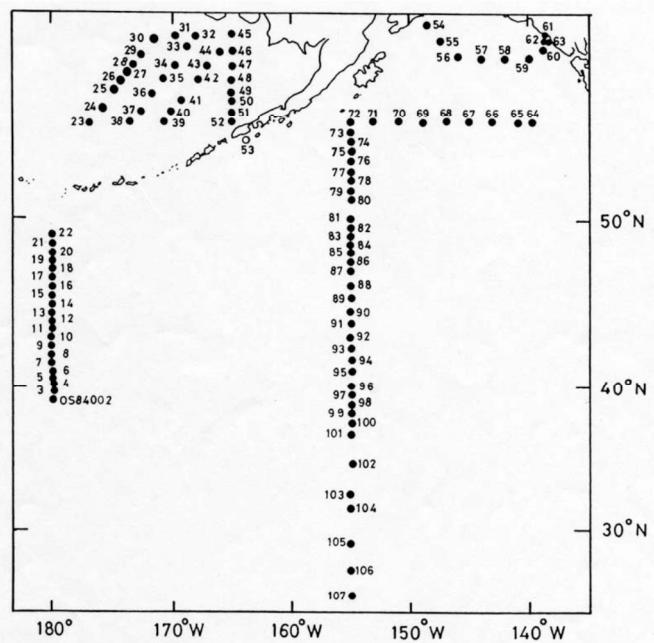


Fig.2 Oceanographic stations of the North Pacific Ocean,  
the Bering Sea and the Gulf of Alaska



日刊水産経済新聞（昭和59年10月26日号）より

支部長)、金沢全鮭連専務など30名。現在日本の水産界で活躍する北大OBが顔をそろえた。

講演をお願いした佐野水産庁長官は「日本漁業の現況と将来」について話されたと共に新おしょろ丸にたいした祝詞、新船長には今後の教育、研究に対しての期待を述べられた。意義深い歓迎懇談会だった(1)。

10月26日。東京出港。10月29日玉野入港、保証工事。11月8日。玉野出港。11月18日ペナン入港。市内観光。11月22日ペナン出港。インド洋の実習海域に向かう。11月25日、海洋観測開始、マグロ延縄実習、12月4日実習を終了してシンガポールに向かった。シンガポールは世界でも有数の貿易港で狭い航路、早い潮流、幅狭する船舶で無線による航行の規制はとても厳しく、正確かつ準則に行わなければならないので、当直に当たると苦労する。上陸してのショッピングがまた楽しい。有名ブランドの専門店あり免税店ありで、無い物は無いと言える程度だ。12月8日。食料・水の補給、観光。12月12日出港、函館に向かった。12月24日、函館に帰港。第6次航海終了。

おしょろ丸II世は昭和36年の南方航海では黒潮共同調査の一環として、マレーシアの要請を受けてボルネオ(現カリマンタン)のクチン沖においてトロールによる生物調査を実施中突然機関室船底に穴が空いて海水が噴出してきた。直径3センチ位なので角材を削って叩き込む事にした。叩き込むと穴も大きくなり6センチ程で止まった。急遽サイゴンに向けて航走した。

サイゴンでダイバーに船底を診させたところ、周辺は変わりがない事が分かり、電触による狭い範囲と判断して、函館に帰えて処理する事になった。既に代船建造が実現することになっていたので、おしょろ丸II世の終焉となつた。35年間に三十万三千マイルを踏破し、千六百人余の人材を世に送りその波乱に満ちた歴史を綴じた。

おしょろ丸III世は昭和37年9月大阪市藤永田造船所で長船尾樓付き船尾トロール型船として建造された。

総トン数1,180t 主機関2000PS 船尾を開口部としてスリップウェーにした。この船型はトロール操業、流し網操業、延縄操業が容易で安全に行われた。本船は可変ピッチプロペラを有し43年にバウスラスターを装備して1,119tとなつた。2機の装備により操縦性能が高くなり、1,200t近い本船でサケ・マス流し網の操業がより容易となつた。

観測用のワインチを設置し付属の計器を配置し漁業調査練習船として、ベーリング海、オーストラリヤ水域、インド洋と航海水域を拡大して漁業実習海洋研究を続けた。また、国際観測に協力する形で実習航海を行つた。北太平洋観測(NORPAC)、赤道域海洋観測(EQEPAC)、国際インド洋観測(IIIOE)、国際地球観測年(IGY)、黒潮共同調査(CSK)と続いた。オーストラリア一周航海もインド洋観測の一環でした。ボルネオ(現カリマンタン)沖のトロールもタイ、マレーシアの要請を受けて黒潮共同調査の一環として行つた。

日米講和後の昭和28年夏期おしょろ丸II世は北洋航海に参加した。アリューシャン列島を抜けてベーリング海に入った。海図が正確でなく濃霧のため便りは魚探のみで大変な航海だった(2)。

昭和30年夏、日米加三国共同の北太平洋国際海洋観測(NORPAC)に参加した。元田茂教授を団長に調査団を編成した。北太平洋を横断、ベーリング海の海洋観測をしてシアトルに寄港した。初のアメリカ訪問である。

この航海で、アリューシャン列島の南側を西進しているアラスカストリームの存在を示し、国際的に高い評価をうけた。その後北洋の研究が進むにつれて、アラスカストリームは魚族の生態に大きな影響を与えていることが、次々と裏付けされている。

7月中旬、ブリストル湾で操業中のカニ工船を見学した。実習生は川崎船に分乗して沖へ網揚げに向かう。雄カニのみ捕獲し雌カニは海に放す事で、網から外す事の面倒さをおしょろ丸に帰ってきてお互いに話し合っていた。

練習船のシアトル入港は戦後初めてとのことで、日系人会、ワシントン大学の方達から大層な歓迎を受けた。

帰路は低気圧に見舞われ7月末函館に帰った。

### ブ系ベニザケにかける執念

昭和28年夏おしょろ丸II世はベーリング海でサケマス流し網の実習を行つた。サイドトロール型の船型での揚投網は苦労が絶えなかつた。網地はラミーだった左舷サイドでアバ棚とアン棚で手操で揚げていた。それでも資源量が今と違つて多いので魚が捕れた。昭和30年夏、日米加の北太平洋国際海洋観測(NORPAC)に参加した。経

度 180° 線上に定点を設けて毎度必ず観測することに決めた。

北部北太平洋、東西ベーリング海、アラスカ湾及びチャクチ海などいわゆる北洋を舞台に調査研究を II 世 III 世にわたって継続して来た。結果は海洋漁業調査要報に印刷された。

昭和 40 年 6 月 27 日午前 3 時「揚網スタンバイ」。船を網に近づけると海中の魚がキラキラ光って見えた。それが少々の数でない。網を揚げると切れ目無くベニが続く、デッキは踊る銀鱗で次第に埋まる。機関部も無線部も加勢に出て来て、出来る事を手伝った。賄は握り飯の炊き出しに大童だ。

位置 56° -15' N 165° -00' W。ブリストル湾口、ウニマック島北側沖合 80 マイル、水温 7.4° C、漁獲ベニ 6,248 尾、シロ 40 尾、マス 2 尾、その他 0、使用流し網 116 反（要報 10 号のデータによる）揚網は昼過ぎに終えたが、獲れた魚の処理は狭いデッキで延々と続いた。

相変わらず毎年北洋調査は続けられた。この結果からベニザケの移動経路を把握した藤井船長は、その海域の海洋構造について更に検討し、研究熱は益々上がるでしょう。

#### 参考文献

1. 日刊水産経済新聞 水産経済新聞社昭和 59 年 10 月 26 日
2. 練習船おしょろ丸 藤井武治 HTB まめほん出版 47 30-33

### 「友朋自遠方來不亦樂乎」

平成 21 年 7 月～平成 22 年 1 月に研究室を訪問された方々（敬称略）

#### 海洋生物学（旧浮遊生物学）

小俣紋（H20 海洋）7/30, 10/16-18、平川和正（S48 修増）8/10, 14、前田恵美（H12 海洋）8/15、内川和久（H4 増）8/20、宮田亮平（H19 海洋）9/9、西山恒夫（S34 ゾ）10/18、谷口旭（S40 ゾ）10/18、志賀直信（S44 ゾ）10/16-18、濱岡荘司（S45 ゾ）10/16-18、平川和正（S48 修増）10/16-18、広海十朗（S50 ゾ）10/16-18、雑賀修（S53 ゾ）10/16-17、山田智（S58 ゾ）10/16-18、宮園章（S58 ゾ）10/16、伴修平（S59 ゾ）10/16-18、石川輝（H2 ゾ）10/16-18、西川淳（H2 ゾ）10/16-17、嶋田宏（H3 ゾ）10/16、富田洋加（H8 ゾ）10/16-17、山田雄一郎（H9 ゾ）10/16-17、帰山秀樹（H11 海洋）10/16-18、井口直樹（H14 博環境）10/16-17、西部裕一郎（H17 博生）10/16-18、有賀亮輔（H19 海洋）11/7-8、鶴山貴司（H19 海洋）11/7-8

#### 資源利用学（旧食品科学第一）

龜山善明（S63 食）7/27、平野次彦（S57 食）8/14、藤本章人（H12 資）10/7、山田大介（H12 資化）10/9、大西寛明（H12 資化）10/22、岩倉和彦（H18 資化）12/28、和根崎智（H9 食）12/28

#### 海洋生物工学（旧水産高分子化学）

樋口智之（H10 化学）8/10、島元章裕（H19 資化）8/10, 1/12、島海滋（H12 資化）11/18

#### 育種生物学（旧植物）

一木重夫（H8 ゾ）10/6、高根慎吾（H19 生）12/8

#### 生産環境安全管理（化学工学）

渡辺一浩（H9 化学）8/24